シリーズ学会紹介 「経営学会」について

経営学会会務委員　　玉置　光司

愛知大学経営学会は、経営学ならびに関連諸科学の学術的研究およびその発展を促進することを目的として、1992年に設立されました。活動の概要は次の4点です。

第1は紀要『愛知大学経営論集』の発行です。経営学会は正会員（経営学部教員）と学生会員（経営学部学生・大学院生）から構成されています。正確に言うと、少数の準会員もいます。紀要は教員の研究成果発表の場となっていて、年2回刊行しています。同時に、全国の主要な大学と紀要の交換を行っています。

第2が講演会、ワークショップへの助成です。講演会はどちらかと言えば専門性が高い話が中心です。経営学研究科（大学院）は講演会等を開催する独自の予算を持っていないので、それを補完する意味もあります。ワークショップは、あるテーマについて全国から研究者が集まって集中的に討議し、情報交換する場となります。

第3が関連書籍や雑誌の収集およびパソコンソフト類の整備です。以上は正会員へのサービスが中心ですが、学生諸君に対する支援が第4として挙げられます。具体的には、優秀な卒業論文に対して、「学会賞」や「努力賞」を授与してその栄誉を称えるというものです。演習指導教官の推薦に基づき教授会が最終決定します。また、学生諸君は入学時に自動的に学生会員になっているので、紀要を無料で受け取ることが出来ます。

現在、経営学会室は名古屋校舎（みよし市）にありますが、2012年度からは新名古屋校舎に移ります。5学会（経営学会、経済学会、法学会、国際コミュニケーション学会、現代中国学会）が1部屋に集まりますので、経営学にとどまらず、他学会の書籍も見られます。関心ある学生諸君は是非のぞいて見てください。特に経営学会のコーナーには過去の学会賞受賞論文が保管されていますので、それを見ることは、自分の論文を作成する上で大いに参考になるでしょう。

会務委員を長年務めていて、最近気になっていることがあります。紀要の刊行回数を年4回に増やす学会があるなかで、経営学会は年2回の原稿を集めるのに苦労しています。毎号、100ページを超えることを目標としていますが、通常の（原稿）募集案内だけではそれに達しない事態がたびたび起こっています。十分な原稿が集まらない場合は協力が期待できそうな会員に特別に声をかけたりしますが、それでも駄目な場合には会務委員が急遽投稿してボリュームを増やし体裁を整えるということも時々あります。

これは正常な姿とはいえないでしょう。いつまでもこのような状況が続くようであれば、何らかの対策を講じなければなりません。しかし、もし、原稿の集まりの悪さが、学外の雑誌に掲載する機会が増えたことの反映であれば、これは大変歓迎すべき現象だと筆者は考えます。評価が確立した学外雑誌であれば、より広い範囲に影響を与えることが出来るからです。紀要は教員であれば誰もが掲載でき大変便利ですが、そのぶん、内容は玉石混交になりがちで、評価が確立しているとは言い難い面があります。日本の各大学が紀要（特に文系）を持つに至った歴史的経緯を詳しくは知りませんが、専門性の高い論文の投稿先を見つけるのが困難と言う事情が当初あったかと推察します。しかし、学問も国際化、グローバル化の波にさらされ、競争の激しい分野ではこのような困難はある意味で解消されてきています。すなわち、国際誌まで視野に入れれば、専門誌への投稿は原則オープンで、誰もが自由に投稿できるようになってきています。経営学も分野が多岐に渡り、それぞれ事情が異なるので、一概には言えませんが、今後は、学外雑誌への投稿が増え、紀要はその役割

を漸次縮小していくのかもしれません。しかし、もし、原稿の集まりの悪さが単に研究成果が乏しくなっていることの反映だとすれば、由々しき事態が起こっていることになります。今後は論文の質ということも含めて、特に若い先生方を中心に紀要の在り方を議論していく必要があると思います。

「韋編」編集部の求めに応じて、経営学会について紹介することになりました。学会の簡単な事業紹介の後、紀要の現状についても触れました。このような場所で触れるのは不適切な気もしましたが、折角の機会なので利用させていただきました。経営学部教員の皆様のお考えを会務委員までお寄せいただければ有難いです。